

中国人を見たら「悪いやつ」と思え！ 『厚黒学』に見る中国人の 「エゴイズム」「恥知らず」「責任感がない」 だから中国人は嘘をつく。

中国の支配者層は「自分だけが儲かればよい」とだけ考えている。

この考え方は政権の中核にしようと、末端にしようと、庶民であろうと揺るぎない。

また中国は賄賂（ワイロ）社会であり、有名校への入学も賄賂。国営企業に就職するにも賄賂（ワイロ）、出世するにも賄賂（ワイロ）。

軍隊に入るのも賄賂（ワイロ）、安全で楽な持ち場に回してもらうのも賄賂（ワイロ）である。

中国で出世するには

◆面の皮が厚く、恥知らずになる必要がある。

◆どこまでも腹黒く、自分の利益のためなら何でもする。

この2つが実践できたら出世して生き延びることができ、実践できないときは人生の失敗者となる。

清朝末の李宋吾（リ ゾンウ）という儒学者の論考をまとめた本は『厚黒学』というそつが中国のベストセラーである。

この本は何度もブームを引き起こし現在も人気再燃中という。

この『厚黒学』に何が書かれているのか？

前漢の初代皇帝「劉邦」と「項羽」の物語である。

「項羽」が天下取りで「劉邦」に負けたのは「厚かましく」「恥知らず」で、「腹黒

くなかった」からだ。

秦王朝を倒そうと「劉邦」と「項羽」はそれぞれの軍を率いて秦の都「咸陽」の近くまで攻め上っていた。

「項羽」は「咸陽」の近くの『鴻門』で宴会を開いて「劉邦」を招くことにした。

「項羽」の作戦参謀は「千載一遇のチャンスで宴会の席で『劉邦』を殺せば天下はあなたのものになります。」と進言した。

「項羽」は『劉邦』は宴会の客人だ。客人を殺せば世間に笑われる。」と「劉邦」殺害の策略を退けた。

結果的に「項羽」は天下をとれず、最大のライバル「劉邦」に天下を奪われる。

『厚黒学』では『項羽』には厚かましが足りず失敗者となった」という。

「天下を取ってしまえば『劉邦』を殺したとて誰からも笑われることはない。」む



しろ、「天下をとれなかった者が笑われる」というのだ。

この『厚黒学』が1911年から論考を発表し、学問として確立し、出版された本が何度もベストセラーとなりブームとなっているということは、中国人に受け入れられ信じられているということだろう。

とても日本の「敵に塩を贈って正々堂々と戦いましょう」というフェアな精神とは相いれないものがある。

彼我のどちらが美しいか、当然、日本が正しく、美しい。

戦争といえども最低限のモラルは守られるべきである。

勝敗は時の運なのだから、勝っても負けても戦争を終えた時点で恨みを残さない。

これが理想で、「捕虜は虐待しない」「非戦闘員は攻撃しない」というのが大原則ではないか。アメリカが得意の「無差別な空爆」や「核攻撃」。これは弱虫の戦闘である。

そんなことまでしなければ勝てないのなら、始めから参戦すべきではない。

日本の武士道、ヨーロッパの騎士道、アメリカの海兵隊の我先に突撃してゆく精神力、正々堂々フェアに戦うから敵に対する尊敬の念も生まれる。卑怯な敵なら蔑まれるだけだ。